

快速

Log ロタオン  
Key Text キー・テキスト  
最短 アクセス  
Access

リーディング

2

# 柳田国男

船曳建夫 編著

筑摩書房

船曳建夫（ふなびき・たけお） 1948年、東京生まれ。文化人類学者。1972年東京大学教養学部教養学科卒。1982年ケンブリッジ大学大学院社会人類学科博士課程にてPh.D.取得。現在、東京大学大学院総合文化研究科教授。文化人類学のフィールドワークを、メラネシア（ヴァヌアツ、パプアニューギニア）、ポリネシア（ハワイ、タヒチ）、日本（山形県庄内平野）、東アジア（中国、韓国）で行なう。編・著書に、『現代の社会人類学』（東京大学出版会、1987年）、『国民文化が生まれる時』（リポレポート、1994年）、『知の技法』（東京大学出版会、1994年）、『新たな人間の発見』（岩波書店、1997年）、『親子の作法』（ベネッセ・コーポレーション、1998年）、『文化人類学のすすめ』（筑摩書房、1998年）などがある。

快速リーディング 2

# 柳田国男

2000年10月25日 初版第1刷発行

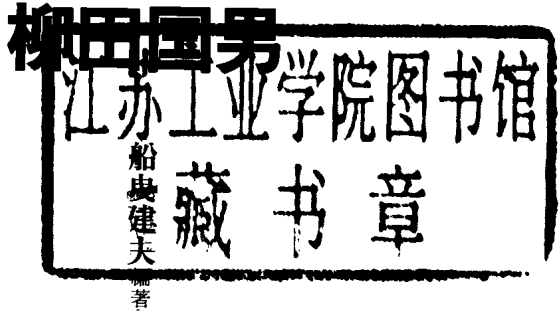
- 編著者 — 船曳建夫  
発行者 — 菊池明郎  
発行所 — 株式会社筑摩書房  
東京都台東区蔵前 2-5-3  
郵便番号 111-8755  
振替 00160-8-4123
- 装幀 — 安孫子正浩  
印刷 — 中央精版印刷株式会社  
製本 — 中央精版印刷株式会社

©船曳建夫 2000

ISBN 4-480-84282-9 C 0039

ご注文・お問い合わせ、および落丁・乱丁本の交換は下記宛へ。  
〒331-8507 大宮市榑引町 2-604 筑摩書房サービスセンター  
TEL. 048-651-0053

快速リーディング 2



筑摩書房



## 柳田国男を読もう——私たちの同時代人として

### 私たちの同時代人

柳田国男は、一八七五年に生まれ一九六二年に亡くなった「昔の人」である。しかし、彼の行ったこと、考えたことは、今、ここに生き続けている。彼が書いたものを読むことは、現在の私たちに、反省とひらめきをもたらす。それは、彼の生きた時代が、もう過ぎ去ったものではなく、私たちと同じものだからである。ちょうど、夏目漱石の小説に描かれている明治の人たちの悩みや問題が、今の私たちがかかえているものと共通しているように、柳田が発見し、論じた日本の文化や社会の特質は、今、この国がかかえている問題の核心に見出される。そのような同時代性が柳田国男の著作にはある。

その時代とは、日本では江戸時代の後期から始まり、現在まだ進行中の、「近代」のことである。人は、その時間のなかでこう考える。昔はのんびりしていたが、今ではすべてのものごとに日に日に加速されている。儀式張った無駄の多いやり方も、どんどん効率的な方法へ、と変わり続けている、と。そして実際、その「今」ですら、いざれ時間が経って振り返るとのんびりした昔、となってしまうのだ。

そこでは、全てが常に、一つの状態からもう一つの別の状態への変化のなかにある、と意識されている。「進歩」、という言葉がキーワードだ。しかし一方で、人は時に、進歩の視点から未来を輝かしくとらえるのではなく、過去を美しく追想したりもする。その場合でも、私たちは必ず、対比される二つの世界や時代の内の、

より「新しい」方に自分が属している、と考えるのだ。全てはただ放つて置けば古くなり、来るべきものは全て新しいものとして現れるように思える。つまりこの近代という時間の中では、新しくなることを止めるのは無理だ、という考え方に支配されている。

こうしたものとして感じ取られる近代を生きた、過去の偉大な思想家の中で、柳田国男は、私たちにとつて、非常に強い同時代性を持つ。柳田と私たちは、柳田がその近代の先頭近くを生きて、私たちはその流れの、現在のところ、尻尾に生きている、という関係にある。その「同時代人である」ということが、単に時間的に同じような時代を生きた、という以上の意味を持つことは、柳田と同じように「昔の人」と思える、他の思想家について考えてみればはつきりする。

たとえば、こうした近代の変わり目に生まれた福沢諭吉（二八三五—一九〇二）は、自分の生涯を「一身にして二世を経るが如し」と形容した。彼の仕事の大半は、古い体制を新しいものに変えるための「啓蒙活動」についてやされた。彼は近代以前の「ちよんまげ」を着けて生まれ育ち、近代の洋服を着て死んでいった。その変転の経験は、近代の中で生まれ、育ち、生きている私たちからはやや遠いだろう。その下の世代の新渡戸稲造（一八六二—一九三三）は、札幌農学校でクラーク博士の影響を受け、キリスト教徒となり、英語が堪能で、自分自身も米国人の妻を持ったという、西洋化されたという意味では近代人の一つの典型である。内村鑑三なども同じ世代に属する。それもまた、現在の私たちのふつうの生き方からは遠い。

柳田はその次の世代として生まれた。ならば、彼はもつと西洋化されたか、というのと、そうではない。柳田が生まれ育つた時期は、福沢などによつて「近代」というものの「要素」が西洋から移入され、新渡戸たちによつて推進され、それが日本の中で発展し始めていたがゆえに、同時に色々な問題をも、もたらし始めていた頃であった。たとえば、日本が社会と経済において近代化を成し遂げていったとき、外国と戦争を起こし、領土を増していったことは、明らかに近代化が成し遂げた「結果」の一つであった。しかし、そのことが、西洋

の近代とアジアの後進的な位置の間で、同じアジアを侵略する後発の「アジアの帝国」という、より複雑な近代国家の自意識を作ることとなった。柳田は、そうした時代の子として、前の世代とは違い、その居心地の悪さを鋭敏に意識しながら、それを背負って生きていかなければならなかった。それゆえに、そう簡単に「西洋化」に進むわけにはいかなかったのだ。それは、先に触れた夏目漱石（二八六七—一九一六）と共通する感性と姿勢である。

言ってみれば、一生の内に二世を「経る」のではなく、柳田以降、日本人は、一生涯を通じて、二つの世、伝統と近代、西洋と日本（アジア）を、常に同時に生きなければならぬ、という問題をかかえたのである。その点で福沢や新渡戸と違い、柳田は私たちにとってより強く同時代人なのだ。つまり、近代化の進行の中で、過去への感性的な愛着と、未来の進歩への理性的な信奉、という異なる二つの価値観を持ち、また、国際的に開かれて行くことへの希望と、この列島の伝統への回帰の願望という、どちらとも決めかねる二つの方向を持ち、そのあいだで何とか「調停」を図ろうとする努力において、柳田は私たちに先駆けて、「近代の日本人」となったのである。

### みずみずしい過去

私たちが柳田国男を、今、読もうとする理由もそこにある。彼の著作には、彼が生をうけた近代の初期の、さまざまな社会の変化の様子や、その激変の中にも生き続ける、日本人の暮らしの豊かさや知恵が詰まっている。それらについての柳田の考察の、非常に現実的で、具体的で、ゆっくりとした迫り方は、後の世の、今になって読む私たち「同時代人」が、自分たちの生活や心の難問に立ち向う時に、考え方のヒントとなってくれる。

しかし、柳田国男を自分の考え方の糧として読むためには、この本の最初にあらかじめ注意しておかなければ

ばならないことがある。それは、柳田国男が、たくさんの人に読まれていながら、その読まれ方には偏りがあり、その偏りがそのまま、柳田の正しい読み方、と誤解されている、ということである。偏りとは何か、それを一言で言えば、柳田国男を「民俗学者」、として読んでしまうことである。

柳田国男は民俗学の父と呼ばれている。このことは、ほぼ事実である。しかし、このことは柳田自身が民俗学者だ、ということを必ずしも指してはいない。確実に民俗学者であるのは柳田の「子」たちであって、父である柳田はそうではない。これは屁理屈ではない。弟子や影響を受けた者たちは、柳田がしていること、したことを学んで柳田の流れを汲む民俗学者になったのであるが、柳田自身は、民俗学者になろうと出発したのではない。ただ、彼の人生の半ばに、民俗学という学問が、彼を一人の大きな唱導者として成立して来て、それによって、彼が学問の組織者として、自ら民俗学者としてふるまうようになったということがあった。しかし、彼の仕事の性格はすでに若年の頃より一貫したものである上がついていた。それは、ただ民俗学と呼んで済むものではない。彼が生涯かけて残した、膨大な日本人の生活に関する考察は、民俗学であれ、民族学であれ、全体をとらえてみればそうした学問の牽制や制約からは自由なところに輝く、近代を生きた人間の、「同時代誌」、と読むべきものである。

このことは、彼の書いたものを素直に読めば、わかることなのだが、辞典的な肩書き、「民俗学者」、というものはおそろしく人を迷わすものらしい。誤解の一端はおそらく、そうした「民俗」的なものだけが彼の仕事として、比較的広く伝わっているところにあるからだろう。私はこの本に彼の仕事から、詩歌は別としてジャンルは問わず、その論理的散文の中から、もっとも高い水準の一七本の文章を選び出した。結果は、民俗学という器からあふれ出し、その器を流し去った。

しかしながら同時代とはいえ、彼の生きた期間が今の私たちから時間的に遠いことは、ときに、私たち読者と彼の書いたものとの間に距離を作る。柳田自身がすでに、これは明治以前のもので今は無い、と語る事物は、



わたしたちからすではるかに遠く、彼がその当時、身の回りにあったものとして語り出す生活の事物ですら、たとえば火鉢や「かごめかごめ」など、おそらく一九六〇年代あたりに日本の社会から姿を消したものだ。その距離は、私たち読者が努力して埋めるしかない。

しかし、くり返しになるが、日本の近代の持つ、今の時代・前の時代、西洋・日本、という二つの間に、いろいろなかたちの調停を行いながら生きなければならぬ、という、宿命的条件づけは、現今の「グローバルスタンダード」対「日本型システム」、といった問題の立て方にも明瞭に反映されているように、柳田と私たちが共有しているものだ。そうした困難な問題に対して、これまでであったものを古びていくものとして捨てるのではなく、しかし幻想的に美化するのでもなく、今ここにある、みずみずしく生き続けるものとして、なつかしさと優しさを持つて見つめ、それがどのように未来を作っていくかについて建設的に思考を広げていった柳田国男を読むことは、私たちが現在を生きるために、大きな力となるはずだ。

(テキストについて。この本では柳田の文章を筑摩書房版『柳田国男全集』から収録した。ただし、いわゆる新字新かなづかいにあらためてある。)

柳田国男を読もう——私たちの同時代人として—— 3

## 第1章 異界を旅する——山人からジェンダーまで

ロクオン 14

キ・テキスト 遠野物語—— 16

「山」が孕んだ近代もある—— 22

キ・テキスト 山の人生—— 28

私たちのもう一つの人生、「山の人生」—— 34

キ・テキスト 遊行女婦のこと—— 40

私たちの移動するネットワーク—— 44

キ・テキスト ある神秘的暗示—— 46

柳田の一生を暗示する幼少のエピソード—— 48

コラム 本に埋もれたる人生ある事—— 50

## 第Ⅱ章 時代を編集する——民俗からモダニズムまで

ロクオン 52

キ・テキスト 木曾より五箇山へ—— 54

明治年間の岐阜山中、「定点」観測—— 56

キ・テキスト のしの起源—— 58

日本をフォクロア(民俗学)する—— 62

キ・テキスト 木綿以前の事—— 66

文化がからだを変える—— 68

キ・テキスト 外で飯食う事—— 72

食物における「個人」の確立とは—— 76

キ・テキスト 町風田舎風—— 80

昔の日本は田園都市だった?—— 84

コラム 「柳田」以前の事—— 88

第三章 文字の声を聞く——「国語」からポリフォニーまで

ロクオン 90

キ・テキスト 伝承の二様式—— 92

書き・読むことと、語り・聞くことのあいだには—— 96

キ・テキスト 涕泣史談—— 100

泣くことのコミュニケーションとしての変遷—— 104

キ・テキスト 雪国の春—— 108

「雪国の春」の美しさを、この名文で楽しんでください—— 114

キ・テキスト 是からの国語教育—— 118

ことははからだから発せられ、

発せられたことははからだで責任をとる—— 122

コラム 柳田史談・衣食住—— 126

第IV章 日本を新たにする——国家からヒューマニズムまで

ロクオン 128

キ・テキスト 海上の道—— 130

晩年の柳田が見た海上の道—— 134

キ・テキスト 農業政策—— 138

日本の食糧問題は、一世紀を経ても変わらない—— 140

キ・テキスト 人間哀愁の日—— 142

関東大震災から二年経ったとき、そこにある哀愁とは—— 145

キ・テキスト 長兄の境涯、弟達のこと—— 149

松岡家五人兄弟の「出世」にみられる、

明治のさまざまな顔—— 153

コラム 生涯八十七年—— 157

あとがき—— 158



# 第I章

## 異界を旅する 山人からジェンダーまで

ログオン

キー・テキスト

遠野物語

山の人生

遊行女婦のこと

ある神秘的暗示

人が狩猟採集の生活から、初めて定着農耕に移ったのは今から約一万五千年前と考えられている。人類はその革命的な食料生産技術の発明によって、飛躍的に多くの人口を養うことが出来るようになり、そこから今の私たちの文明や国家が生まれることとなった。しかし、その定着農耕はまた、生活の単調さ、言ってみれば、人間に退屈さをも同時にもたらした。獲物や採集物を求めて常に移動を行っていた狩猟採集の暮らしから、一カ所にとどまり、住居を建て、よく知った土地を相手に、季節の移り変わりを待ちかまえて、それに対処する、という営みに変わったのだ。

人にとってそのとき、世界は二つに区切られ、自分たちの住む共同体の外は、未知の場所と変わった。その世界は外界というより、私たちの世界とは断絶のある、「異界」と呼ぶほうが性格がはっきりするものであった。そしてそこに住むものを「異人」として区別しながらも、特別の場合には私たちを訪ねてくるもの、と考えることもあつたらう。日本の祭に、そうした異人が山の神として一年に一回里に降りてくる、という考え方があることはよく知られている。

そうした民俗、山の神や来訪神について、柳田は数多くの文章を表している。しかし、この章で取り上げたのは、そうした定着生活の祭のサイクルに収まる、年中行事化した異人ではない。この章にあるのは、日常生活に収まりきらない事件、定着ではない移動を業とするもの、そうしたサイクルや境界を越えていく想像力が作り出したものである。たとえば、「遠野物語」や「山の人生」が描き出すのは、秋の刈り入れの後の静かで穏やかな日本の村、といったイメージからは全く遠い、先に述べた定着農耕の単調さを突き破る、異界への出奔とそこからの乱入。そうした事件によって彩られる、生々しい異形の世界だ。

柳田国男はなぜこうしたものを書いたのであろう。それは、彼が、日本という列島社会が、定着した生活を送る人々、たとえば農耕民と、そのあいだを動く別種の人々、サンカや木地師、旅芸人、という二種類の人間によって、成り立っていると、考えたからだ。ただ、柳田の長い生涯の中では、その二つの種類の人々に、常



に同等の関心を配分していたのではない。その初期には、移動する人々、山の民や漂泊民、女性への関心が強く、後半生にいたって、論ずる対象は、彼が「常民」と呼んだ定住する人間に比重が強くなった。しかし、自ら無類の旅好きで、成長期に関西から関東へと移り住んだことも影響していると思われるのだが、生涯、彼の思考の中には、人々が移動することで起こる社会のダイナミズムへの注目が消えなかった。そうした移動する人々への強い関心は第四章で扱う、彼の最晩年の、海をわたって移動する人々の、たゆまぬ強い営為を見透かす「海上の道」まで一貫している。

彼の想像力はまた、地理的な異界への旅だけではなく、精神の異界への交通も可能とした。柳田は自分が、幼少の頃から異常なる感覚に襲われることを感じながらも、ただそれに蹂躪されるのではなく、感覚を研ぎ澄ましながらも理性をコントロールした。だから、彼は、憑依者のように自ら無分別に語り出すのではなく、かといって、事実を分析して理論を打ち出していくだけでもなく、書物であれ、話し手であれ、その言葉の中に自分が感応するものを探りながら、忍耐強く、そこに異界の意味を読みとろうとする、たぐい稀な読み手、聞き手であった。「遠野物語」での彼の役割はそうしたものであった。

そのような、対象を遠巻きにしながらいつめていく柳田の方法が、時として、人間の生の奥深いところにあるものを、直接なまま露出させることを避けているように思えて、もどかしくなることがある。たとえば「遊行女婦のこと」の中の性的なことから扱い方は、ずい分と持って回ったようだが、これでも柳田としては直接的な方なのだ。しかし、そうした抑制は彼によって取られた意識的な戦略であった。詩歌という「文芸」での表現を青年期に捨てた柳田は、自身の鋭敏な心の揺れが時には逸脱するのを抑えながら、それを押しつぶすことなく、むしろそうした心の感応を生かしていく「学問」を見つけようとした。その最初の回答が「遠野物語」であり、「ある神秘的暗示」は、それが人生の終着点から逆に創り上げた柳田の自分自身に対する完結的な物語であったとしても、彼が生涯をかけた異界との交渉の出発点を鮮かに明示している。